

中学生に出前授業実施

みて、きいて、物流を体験しよう

近運局など

近畿運輸局が主催し、大ト協などが協力するスペシャルプログラム「みて、きいて、物流を体験しよう」が10月24、25の両日、大阪府の豊中市立第七中学校2年生約1200人を対象に行われた。

1日目は同中学校で、出前授業が実施された。近畿運輸局交通政策部環境・物流課長の足利剛氏が「物流とは」について講演。日本は輸出入品のほとんどが海運で運ばれること、物流の仕組み、生活を支える仕事について解説した。



越野社長が講義

続いて事業者を代表し、越野運送（大阪市都島区）の越野泰弘社長が同社の歴史やサービスマンの役割について解説した。越野社長は「運送業は荷物だけでなく、お客様の思いも運んでいる仕事」と、トラック運送業を紹介。B to Bの配送だけでなく、吹奏楽部の楽器輸送や運動部の合宿の手伝い（さつ）には展覽会・美術展の展示品輸送など、生徒に身近な物流も紹介した。

さらに、スライドを用いて、トラックに積むことのできるか、最近では高齢者や女性も多くトラックに乗っていることを紹介。越野社長は「トラックドライバはお客様に『ありがとう』がいただける仕事。感謝の言葉が何よりもやりがいになる」と話した。

最後に幕末の思想家・吉田松陰の「夢なき者に理想なし」の言葉を引用し、生徒に「皆さんはさまざまな可能性を秘めているので、どんどん夢に挑戦してほしい。次の世代を笑顔で支えてください」と締めくくった。代表の生徒は「物流という仕事の大変さ、重要さを知った」とお礼のあいさつを述べた。

講義終了後は、校庭に4つのウイングトラック（CNG車）を展示し、生徒らはその大きさや迫力に驚きの表情を見せた。

2日目は、同中学校の2年生約1200人が、佐川急便大阪湾岸センターの物流施設を見学。



1階の手仕分けに採用されているコンベヤーの役割や安全面に考慮して仕分け機が設計されていることなどが説明された。2階では、配送の行き先を自動で振り分けられる送り状のバーコードスキャナー読み取り機や通信販売などの小物商品を仕分ける機械の仕組みなどの説明とデモンストレーションが行われ、生徒らは声を出して驚いていた。

屋上では、同社が設置しているソーラーパネル1575枚の電力量のクイズなどが出された。

（中村優希・木村麻理奈）
（レイアウト・石津あや子）